とうかい

2023 年 6 月 16 日　NO.643

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会　広報部
〒460-0018　名古屋市中区門前町1番23号
東海教区教務所内
TEL 052-321-0028　FAX 052-332-4097
e-mail　info@tokai-hongwanji.net

東海教区鈴鹿組　活動報告

鈴鹿組では、子ども・若者ご縁づくりの取り組みとして、毎年４月上旬の日曜日に「鈴鹿組はなまつり」を開催しています。近年のコロナ禍による延期もありましたが、お陰さまで、本年の開催で 14 回目を迎えました。

第１回から第５回までは、鈴鹿組 13 ヶ寺を２つのグループにわけて、軽トラックで花御堂をお運びして、隔年で巡回していましたが、各ご寺院さまでの滞在時間や、どうしても内容が制限されるので、2012 年の第６回から１会場にしてお祝いすることとしました。

また、鈴鹿組の各教化団体の代表においでいただき、実行委員会制としております。

本年は４月２日（日）に津市芸濃町の養宗寺さまにて開催いたしました。毎回前日に準備会をいたします。今回は１日（土）に養宗寺さまにて組内各寺の代表、鈴鹿組はなまつり実行委員が集合し、花御堂を生花、白象をお花紙などでお飾りし、境内に旗をたてて参加者の方々をお迎えする準備をいたしました。

当日は「らいはいのうた」のお勤め、灌仏、パネルシアターでのご法話、桂三発さんによる落語と、ご縁の皆さまととても楽しくお釈迦さまのご誕生をお祝いさせていただきました。

今回、参加総数は 58 人で、そのうち子どもさんのご参加は 16 人でした。どの地域も少子高齢化が進み、子どもさんをお寺に集めることはかなり難しい状況となりましたが、鈴鹿組ではさまざまな方々にご協力をいただきながら、一人でも多くの方にお寺とご縁をむすんでいただくよう「はなまつり」を開催しています。

Contents

鈴鹿組活動報告	P1
こころばなし	P2
声	P3
特集	P4.5
啓発資料紹介	P6
御伝鈔解説	P7
お坊さんの書棚	P8

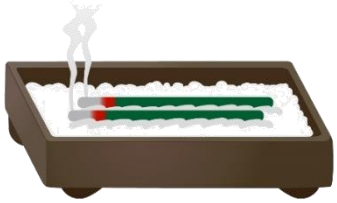
『横のおはたらき』

楠原　純悠（中勢組西向寺）

お線香をお供えする時、香炉に縦に立ててお供えすることが一般的にはよく知られていますが、浄土真宗では横に寝かせてお供えするのが作法となっております。これは御本山の常香盤での焚き方、灰に型を使って溝を作り、その中に燃香を入れて一本の棒状になるようにして端からお香を焚いていることを模しているためです。

さて、横という言葉について少し考えてみますと、横という言葉が使われることわざでは、「横槍を入れる」や「横車を押す」「横紙破り」等があります。「横槍を入れる」とは物事の流れを邪魔するという意味ですし、「横車を押す」「横紙破り」は道理に合わないことを無理やり力ずくで押し通すという意味ですが、あまり良い意味でつかわれることわざではないかもしれません。多くの場合物事が順調に進んでいる様子や、道理に合っている様子は縦と意識されているからこそ、それにたいして邪魔をすること、道理に合わないことを縦と反対の横と表現するのでしょう。

今までの人生をふり返ってみて、全ての物事が自分の思うとおりに進んできたと感じる人はおそらくいません。中には道理に合わない理不尽なことを他人から押し付けられたり、あるいは逆に理不尽を押し付けたりということも長い人生の中にはあるかもしれません。一般的な社会の中でも物事が順調に、道理に合って、理不尽なく生きていくということはとても難しいことであるように思います。



では仏教における道理とはどのようなものでしょうか。一般的には善い行いをして修行をし、精進して徳を積んでいくというものかもしれませんが、そのためには優れた才能や恵まれた環境がなければ難しいことです。出来る人ならばその通りに進んでいくことができますが、やはり善い行いをしたくても出来ない人や、がんばりたくても環境が整っていなくてがんばれない人、やりたくないと思っていても悪いことをせざるをえなかった人など一般的な物事の道理からいえば外れていってしまう人も多くいることです。

しかしそんな道理から外れていってしまうような者こそを目当てに、私が必ず救いとっていくぞ、とはたらいて下さるのが南無阿弥陀仏の阿弥陀様です。全ての者を一人も漏らさず本当の幸せと安らぎを与えていきたいと願ってくださり、たとえ周りの全てが「どうしようもない奴だ、救いようのない落ちこぼれだ」と見捨てたとしても、自分で自分自身を見限って諦めていくような事があっても、私はあなたを決して見捨てないよとおっしゃって下さるのが阿弥陀様です。阿弥陀様のはたらきは、あらゆる道理に横槍を入れて横車を押してでも私を必ず救ってくださるという、仏教の道理をも超えた横のはたらきであるといってもいいでしょう。

浄土真宗においてお線香を横に寝かせてお供えする作法にこのようないわれがあるわけではありませんが、お仏壇におつとめさせて頂く時にその横になったお線香を見て「阿弥陀様のおはたらきは、あらゆる道理を超えてでも必ず私を救い取ってみせるという横のおはたらきであったな。」と味あわせていただく事であります。

南無阿弥陀仏

『孤独を癒すもの』

R さんは、自坊に度々お参りをしている女性。明るい性格で、よく笑う。お寺で会うと「家で、孫のお守りをしています」という話を本人から聞くので、家族で楽しい日々を過ごしているのだろうと思っていた。

ある日、R さんの家をはじめて訪ねた。広々とした間取りの立派な一軒家だった。R さんは、数年前からその家にひとりで住んでいるらしい。長年付き添った夫に 10 年前に胃ガンで先立たれ、息子はすでに東京で仕事と家庭を持ち、娘はそれほど遠くないが別の家に嫁いでいった。「この前、“おばあちゃん、ひとりで可哀想だから”と、孫から一緒に寝る為のぬいぐるみをもらいました（笑）」と言う R さんは、お寺で会うときと違って少し寂しそうに見えた。

毎月、自坊で開かれる法話会に、R さんは今日もお参りをしている。しかし、いつもと様子が違う。ガンの治療で入院していた妹さんから、「余命宣告を受けて、もう長くない」と伝えられ、相当落ち込んでいるとのことだった。「本当に私はひとりになってしまいます」そう言いながら R さんは目を赤くして泣いていた。

後日、R さんに会うことがあった。「最近はお仏壇の仏さまに手を合わすことが増えました」と話してくれた。どうやら先日より少し落ち着きを取り戻したようだった。その後も、R さんはお寺に度々お参りをして、家族で暮らした家でひとり過ごしている。けれど、以前のように、泣きくずれるほど寂しそうにはみえない。大切な我が家にある、自分を支えてくれるものに気づいたからだろうか。

『コロナ禍での学び』

新型コロナウィルス感染症が拡大し早４年目。子どもが入学と入園を迎える時期でした。卒園式、入園式、入学式と全ての式が短縮となり、子どもたちにとっても親としても残念な終り方と始まり方でした。さらに休園・休校がしばらく続き、友達と一緒に学ぶことも遊ぶこともできず自宅で過ごす日々でした。体力が落ちないように境内で遊んだり自宅学習したりと子どもと接する時間が増えたのはうれしいことでした。その反面、月忌参りをはじめ法務はほぼ全てお休みとなり、法要も開くことができずご門徒の皆さんとのご縁は薄くなっていく一方でした。

私の時にはなかったオンライン授業やタブレットを利用した勉強の仕方など、コロナ禍ならではの勉強方法に戸惑いながらも新生活が始まったときの子どもの顔は輝いていました。

コロナと共に歩み、下の子もおかげ様で一年生になりました。毎日元気に「いってきます」「ただいま」と学校へ行き帰りする姿を見て大変うれしくありがたいなと思います。二人とも学校から帰ってくるとその日の出来事を楽しそうに語ってくれます。先生のおかげでもあると思いますが、友達と一緒に学び遊び毎日充実しているのだなと感じています。

コロナ禍で我慢をしてきたことも多いけどそれ以上に、子どもたちの元気さ、力強さから勇気づけられることが多いです。育てているつもりでも親として人として育ててもらっているのだなと感じます。

コロナが落ち着いてきた今、人との出遇い、生きる大切さ、命の尊さに気づき共々に学びそして成長し力強くまことの命の輝きに歩みを進めたいと思います。

現代版寺子屋　スクール・ナーランダ vol.7 東海　報告

３月４日・５日に、スクール・ナーランダ Vol.7@東海を無事開催することができました。このスクール・ナーランダは全国の各ブロックの持ち回りで開催されています。企画が始まった２年前は、コロナ禍まっただ中で、先の様子が全く分からないままでした。その中でも、若手僧侶５名が中心となり実行委員会を立ち上げ、マネージャーさん、別院職員さんの力を借りながら、10 代から 20 代の運営スタッフ（チーム・ナーランダ）を集めることに注力し、10 人のスタッフが企画の核となってくれました。チーム・ナーランダとして動き出してからもなかなか直接集まって話すことがかなわず、大半は web での会議を重ねることになりましたが、スタッフのみんなが慣れていたのでスムーズに会議をしながら準備を進められたように思います。

このスクール・ナーランダという企画は、現代社会に生きる若者が何を悩み、何を抱えているか、その悩みにどのようにして応えていくかということを課題としているため、当事者であるスタッフの生の声がとても大事です。やはり多く聞かれたのが、コロナ禍で希薄になってしまったコミュニケーションについての問題でした。また、日ごとに変わっていくネット社会とどのように付き合っていくのか、ということも問題にしている方が多くいました。このことをもとに、プロデューサーの林口さんとともに紡ぎ出したのが今回のテーマ、「共鳴〈いいね！〉か、断絶〈ブロック〉か。～「言葉」によるコミュニケーションのはじまりと現在～」というものでした。

当日は、各講師陣による圧巻の講義で、参加者・スタッフともに大きな感銘を受けました。それぞれ別の分野からのご講義でしたが、共通して、実際に人を前にしてコミュニケーションを取ることの大切さ、メディアの便利さと危険性・限界というテーマがあったように感じました。また、３年ぶりの現地開催ということで、コロナ禍でもスクール・ナーランダのもう一つの肝である参加者同士のディスカッションの時間が取れたので、参加者の方にはいろんなものを持ち帰ってもらえたのではないかと思います。

いろいろと反省点はありますが、この企画だからこそ集まったスタッフとの出会いは今後も大切にしながら、この度の経験を活かしお寺という場所が若者にとっても「居場所」となっていくように活動していきたいと思います。

髙梨顕浄（額田組誓林寺）

チーム・ナーランダとして参加して

尾崎友則（おざきともの り）

２日間のイベントにチームナーランダとして関わることができて本当に良かったです。最初は何もわからず、初めて聞く世界観、用語ばかりで少し心配でしたが、時間が経つにつれて、意味もわかり楽しくなってきました。イベント当日も、サポートに入るだけだと思っていましたが、各講師のお話を聞いて、私のこれまでの価値観に加えて新たな価値観と出会うことができました。

また、参加された方から、同じチームに尾崎さんがいて良かったと言ってもらえたのも良い思い出です。この２日間で学べた事はこれからも忘れず、生活に活かしていきます。

今回、教区の先輩のお誘いを受けてチームナーランダとして運営のお手伝いをさせて頂きました。将来自坊を預かっていく身として、寺院で行事を運営していく上でのノウハウや大変さが、スタッフをさせて頂いた事で学ぶ事が出来ました。寺院で学ぶということに関して、寺院は法事、法要でしか行く事が無い場所であると思われがちではありますが、今回のスクールナーランダのように、今を生きる智慧を学ぶ場、地域の人々とのご縁を作る場として現代の人達に知って欲しいと思いました。また参加されていた方は寺族よりも一般の方々が多く、仏教に関心を持つ若者は少なく無い事を実感しました。

小林由悟（こばやしゆう ご）

高味愛理（たかみあい り）

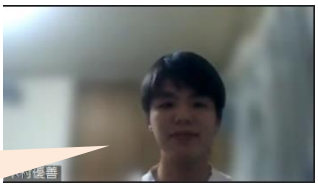
当日スタッフという形になってしまいました。ですが、スタッフの皆さまが時間を掛けて準備してきた企画が、参加者を幸せにできていた事を嬉しく感じました。特に、参加者とチームで意見交換をする際には「活気のある話し合い」が多くこちらが圧倒される程エネルギーに溢れる空間だったように思います。

次回の北海道には、足を運べるか未定ですが、また東海にやってくるチャンスがあれば今度こそ全力で若者を盛り上げていきたいと強く思っています！！

貴重な機会をありがとうございました。

イベントや寺のことに不慣れでも参加していいのかとても不安でしたが皆さんとても温かく迎えてくださり、人と話すことが苦手な私でも気づいたら最初の不安を感じず、自分から話しをする程楽しい時間を過ごせました。

本番当日は、どのくらいの年代が何人来るのか、不安と緊張でいっぱいでしたが、想像よりも幅広い年齢の方が参加されていて、講師の先生方のお話含めていろいろな年代の方々の様々な意見や考え方を知れ、また機会があれば参加したいと思いました。



木村優善（きむらまさよし）

伊藤誠英（いとうじょうえい）

私がこの企画に参加して良かったと感じる事が一つあります。それは同世代の僧侶の方々、同じ志を持つ一般の方々と交流する事ができた事です。私は自坊を継いで今年で４年目になりますが、一寺院の住職というのは自営業者と基本的に相違ありません。昨今のコロナ禍の影響もあり、仕事以外での新しい人との繋がりや出会いが自坊を継いでから今まで全くありませんでした。そういった点で今回参加して良かったと思いました。

今回の企画を通して、同世代の方々から大きな影響を受けました。これからは自分の殻に閉じこもらず、積極的に企画に参加しようと思います。

関係者の方々、今回は誠にありがとうございました。

ハンセン病差別と向き合う－本願寺教団の歩みと課題－

2023（令和 5）年 3 月に宗派より表題の冊子が全寺院に配布されました。コロナ禍でのコミュニケーションの不足や、親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要の準備時期であったこともあり、情報が行き渡っていないところもあるようです。

2019 年に報告された『「浄土真宗本願寺派とハンセン病問題」総括書』のなかの「提言」に基づき、この冊子は作成されました。
ハンセン病の知識やこれまでの差別、教団との関わりの解説に加え、感染症と差別という視点で COVID-19 も扱う論考や、差別を温存してしまった我々の教学に対する問いにもふれています。

文中で「私たちの教団は、その体制を維持する為として、それぞれの時代の社会体制や為政者に無批判に迎合した歴史を有してきました」とあります。

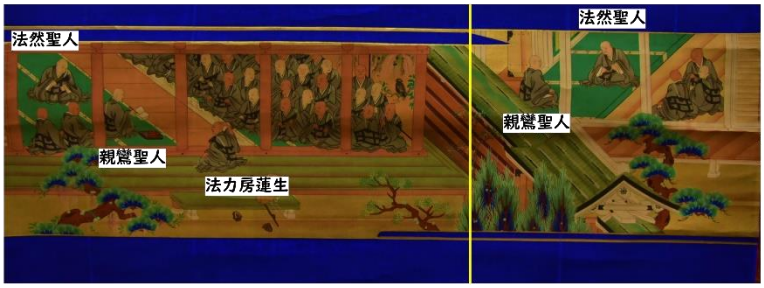
専如ご門主は『法統継承に際しての消息』において「宗門の過去をふりかえりますと、あるいは時代の常識に疑問を抱かなかったことによる対応、あるいは宗門を存続させるための苦渋の選択としての対応など、ご法義に順っていないと思える対応もなされてきました。このような過去に学び、時代の常識を無批判に受け入れることがないよう、また苦渋の選択が必要になる社会が再び到来しないよう、注意深く見極めていく必要があります。」と述べられています。
また、親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要でのご親教においても「これまでの私たちの教団の歴史を振り返りますとその時々の社会状況の中で、仏法の名において国家の植民地政策や戦争遂行に協力したり、また同朋教団を標榜するにもかかわらず、今日まで部落差別やハンセン病差別などの差別や偏見を温存したり助長したりしてきました。このように教団は時の権力に翻弄され、あるいはそれに迎合するなど時代の波を乗り越えることができずに歴史を重ねてまいりました。この度のご法要にあたり、大切なことは『一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり』と述べて、いのちの尊厳と平等に基づき、他者への限りない共感を抱かれた親鸞聖人のお心に立ち返ることでしょう。そのためには私たち一人ひとりが過去の過ちを振り返ることのないように歴史を振り返り、いのちの尊厳を傷つけ、妨げているものをしっかりと見抜いていかなければなりません。」と踏み込んでいます。

昨年報告された『本願寺派寺院と戦争－「宗門寺院と戦争・平和」調査報告書』や本冊子が全寺院に配布されたことは、この課題を宗門の課題としてあらためて提示されたものと考えられます。

第二幅 第六段「信行両座」第七段「信心諍論」

御絵伝第二幅の真ん中の二図（第七・第八図）が、この第二幅の中心であり、御法義の核に当たる物語です。

法然聖人の教えは「専修念仏」の法義であります。端的に言えば「念仏を称えたら誰もが平等に阿弥陀如来によって往生ができる」というものです。どこまでも「念仏の行」で法義を立て、表面的には非常に解り易いものでした。しかし親鸞聖人が書写を許された『選択本願念仏集』の最後には「この本を読み終えたら壁の底に埋めなさい」と記されてあります。表面的には非常に解り易い法義ですが、その中身をきちんと理解することは難解であり、中途半端な知識で読めばかえって誤解を招く恐れがある法義でもありました。法然聖人の御弟子の中でおよそ 10 名程しか書写を許可されていないことからも、親鸞聖人は「専修念仏」の法義をきちんと理解されていたという事が伺えます。



第二幅 第七図
（本願寺名古屋別院蔵）

まず第七図右は、浄土往生について門弟に問い訊ねたいと、親鸞聖人が法然聖人に提言されている様子です。「信行両座」とは、浄土往生について、本願を信じる「信心」で決まるのか、それとも念仏を 励む「行」で決まるのか、どちらの（両）座なのかというお話しです。左図の右側には 300 余名の「行の座」に立場を取る門弟と、左側の「信の座」に就かれる親鸞聖人・聖覚・信空・遅参した法力房蓮生（熊谷直実）の 4 人に、法然聖人も座される模様です。

第二幅 第八図
（本願寺名古屋別院蔵）

次の第八図には「信心諍論」=「信心一異の論争」の様子が描かれています。これは他力の信心か、自力の信心かということで法然聖人と私（親鸞聖人）の信心は全く同じでありますと、主張されたところ、他の御弟子方は「そんなはずはない」と反論され、自力の信心と他力の信心のすみ分けを表されてあります。

これらの絵図は浄土真宗における「法義の要」を示される核の部分です。浄土往生は私が念仏を称える「行」ではなく、本願を信じる「信心」で決定するということです。またその「信心」とは阿弥陀様より賜りたる他力の信心です。法然聖人も親鸞聖人もどちらも賜りたる「信心」ですから、共に同じ信心であり、参らせて頂く浄土も同じということです。

このように、「救い」がどこでどのように決まるのか、その中身を描かれてあります。改めて私たちもこのお示しを大事にしたいと思います。それと第二幅第九図（一番上の図）が親鸞聖人七十歳の物語「入西鑑察」が後に追加され第二幅として描かれております。

藤野和成（桑名組教宗寺）

~お坊さんの書棚~

『102 歳、一人暮らし。』　　石井哲代・中国新聞社【著】文藝春秋【出版】

本書は広島県で暮らす石井哲代さんの日常生活を紹介した中国新聞の連載記事を一部、加筆修正したものです。「人生 100 年時代」といわれる現代において実際に 100 歳をこえている方が、どのような毎日を過ごしているのか「こんな年の取り方ができたらいいなぁ」と思わせてくれる本です。

この本の主人公の石井哲代さんはとてもお元気です。畑に行き農作業をし、地域の方々との交流をし、生活の中にお念仏のある方です（本願寺派のご門徒さんです、本願寺新報でも紹介されました)。とてもお元気な方ですが現在に至るまで、ご苦労や悩みを重ねてこられた様子もうかがえます。

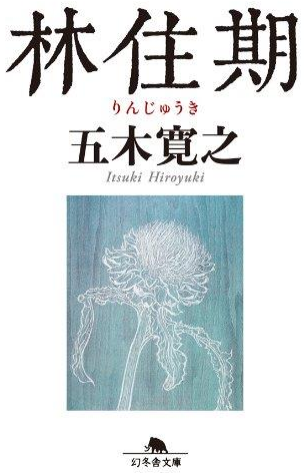
皆が皆、この方のように元気な 100 歳を迎えられるわけではありません。しかし石井さんの毎日の姿は、今の私がどのように生きているかを問いかけられているようにも思えます。「同じ生きるなら、一生懸命楽しまんと損です」とは石井さんの口癖だそうです。何歳であってもそのように生きたいと思わせてくれる本でした。

~お坊さんの書棚~

『林住期』　　五木寛之【著】幻冬舎【出版】

宗祖ご誕生 850 年・立教開宗 800 年の慶讃法要にあたって、京都南座で上演された演劇『若き日の親鸞』の原作者、五木寛之氏の著作から『林住期』をご紹介いたします。

釈尊によって仏教が説かれた地である古代インドでは、人生を学生期、家住期、林住期、遊行期の 4 つの時期に分ける「四住期」という考え方がありました。学生期に人として生きる術を学び、家住期は仕事を持ちながら家庭を築いて、林住期になると隠遁をして瞑想をしながら人生の思索に入り、そして最後、遊行期でこれまでに得た知識と経験を後世に伝えて自らの生涯を終えることを、人々に教えます。

著者は、現代の日本人、とくに仕事を退職した世代が、その後の人生をどう生きるのか考える上で、四住期のうち「林住期」がその指針になるというのです。“仕事をするために生きてきた”、“家庭を支えるために生きてきた”という人が、本当に自分の生き甲斐となるもの、自分のためになる生き方を見出してゆく期間、それが現代の日本人が迎えるべき林住期だといいます。

他にも書籍の中では概要だけでなく、[林住期の体調をどう維持するか]、[林住期の退屈を楽しむ]、[五十歳から学ぶという選択]、[心と体を支える「気づき(サティ)」] といった章が設けられてあり、著者が勧める林住期の過ごし方が書かれてあります。退職世代はもちろんのこと、若い世代の方が読んでも、自分の人生観を変えてくれる 1 冊だと思います。ぜひ一度、手に取って読んでみてください。